

カムイたちと幸恵さんのこと

瀬戸山ひろ

「神謡集」はその名の示す通り「神（カムイ）」がみずから歌った「謡」を集めたものです。ここに登場する「神」の観念はアイヌ民族独特のものでした。人間（アイヌ）にとって「神」とは、この世の人間以外の自然物、全てを指します。人間にはない力を持ったもの全てが神なのです。最高神は「火」(赤い着物のお婆さん神)で、「水」や「木」の神もいます。梟・狐・兎・狼・蛙・獺^{かわうそ}・沼貝なども神、沼や海・谷なども神です。そして「オキキムリイ」という半分神で半分人間という神様もいます。日本の古い物語に登場する「神」とも違い、命に宿る「魂」のようなものを連想させられます。私が面白いなと思ったのは、神には善神と悪神がある、ということでした。中にはその両方が入り交じった神もあります。

善神は、自分をちゃんと祭ってくれているのなら、人々を飢饉からでも救ってくれる神様です。普段から「神」を大切に扱う人間は護られる、という思想は何処の国にもありますが、悪神に関する思想が実に変わっているのです。

悪神というのは、人間（アイヌ）に悪さをする神です。ほとんどの神が、癩癩もちで、すぐカッとなって、おまけにいたずらが大好き。『悪い心がむらむらと』でてくると、悪さをし、ムカツク相手を投げて、ひっぱたいて、殺す！これが悪神です。しかし、「神謡集」では、最後にはいつも殺される神様なのです。たいていが、梟以外の動物や特定の自然物です。その殺され方を見ると、実に単純な軽い死、というかユーモアさえ感じられる死に方です。何よりも私が興味深く感じたのは、悪神自体が自分のことを『眼の曇ったつまらないやつ』で『悪いつまらない死に方』をしたと認めている点です。その意味では、かわいい神様といえるかもしれません。しかも、「神謡集」では、多くの謡が

私は「悪い心」を持って人間（アイヌ）に悪さをしたので、ひどい目に遭いました。だから、子孫達よ、決して悪い心を持ちなさんな。人間にいたずらをしてはいけませんよ。

という言葉で終わっています。人間を護るありがたい、もっと言えば都合のいい言葉で終わっています。ここにはアイヌの人たちの願いがこめられているのでしょう。

悪神の一つ「谷地の魔神」について、謡の中味を紹介しましょう。

二人の若者がいて、一人は神のように美しく、もう一人は様子の悪い顔色の悪い青い男でした。「谷地」のそばを通るときに顔色の悪い男のほうが「おお臭い、まあ汚い、何だろうこんなに臭いのは」とひどい悪口を言って「谷地」の神を怒らせました。二人は「谷地」に追いかけられ、村に逃げ帰りますが、谷地の神は顔色の悪い男を丸飲みしてしまいました。さらに、美しい男をしつこく追いかけます。・・・結局、谷地の神は美しい男に首を射られて死んでしまいます。実はこの男は人間ではなくて「オキキリムイ」(半神半人)だったのでした。オキキリムイは、人間の村に迷惑をかける「谷地」の神をヨモギの矢で殺すために策略を仕掛けていたのでした。なんと先の顔の青い男は人間ではなくて、オキキムリイが自分の放糞で作った男なのでした！！

臭かったわけですよ、自分が臭いのですから！

ここに登場する「谷地の魔神」は龍の姿をしていたそうですが、今で言う土石流のような自然災害を象徴しているのだと思われます。海に近い山に暮らしていたアイヌの人たちにとって山崩れ、土砂災害は恐怖の的、自分たちの平和を乱す悪の根源だったでしょうね。だからこの「谷地の魔神」の謡の終わりも

「私は魔神であったから地獄に追いやられた。これからはもう人間の国には何の危険もないであろう。」

と、人間にとって、たいへん都合のいい締めくくりになっているのももっともだと思います。

さて、善神の代表である梟神について印象深い謡があるので次に紹介します。梟神は怒りっぽい狐や兎の神とはかなり異質に描かれています。「銀の滴降る降るまわりに」という謡に登場する梟は、貧しい家の子に同情する優しい神ですし、談判のできる動物を探して、神をていねいに祭るよう人間に教えてやろうとする神も梟に宿っています。梟は鳥の中では特別の霊力を持った鳥だったようです。北海道に生息するシマフクロウ・・・私はあの鳥の顔を思い浮かべるといつも賢そうな老爺を連想するのですが、アイヌの人たちもそうだったのかもしれませんが。

さて、「銀の滴降る降るまわりに」に登場する梟神は、金持ちの子供の矢にはあたらず、貧しい子どもが射た木製の粗末な矢で殺されるのですが、その場面は次のように描かれています。

貧乏な子は / 片足を遠く立て片足を近く立てて / 下唇をグッと噛みしめてねらっていて / ひょうと射放しました。小さい矢は美しく飛んで / 私のほうへきました。それで私は手を差しのべてその小さい矢を取りました。 / クルクルまわりながら私は / 風を切って舞い下りました。

私はこの部分を読んではっとしました。波線部にあるように、この神は貧しい子を哀れに思ってみずから死を選んでいるのです。

この後、子どもの家の者から

ふくろうの神様、大神様、貧しい私たちの粗末な家へお出下さいました事、有難う御座います。

と言われ、死体がいねいに祭られます。そして家人が寝静まると

私は私の体の耳と耳の間に座っていました

(神は死ぬと、宿った肉体だけが死ぬ。神本体は眼に見えず、死体の耳と耳の間にいると言われていた。)

やがてこの神は、起きあがって『銀の滴 降る降るまわりに、金の滴 降る降るまわりに』という歌を『静かに』歌いながら宝物を家中にまき散らすのです。ここで梟は神を大切に(つまり神の宿る自然物を大切にすることです。)貧富分け隔てせず、仲良く生きていけばきっといいことがあると教えています。先ほどの「谷地の魔神」(土石流?)とは謡い方が随分違って哀しい程の優しさにあふれています。

ここの場面描写はたいへん美しく私は大好きです。知里さんの最初の訳は「あたりに降る降る銀の水 / あたりに降る降る金の水」だったそうで、どこかの時点で推敲されているわけですが、比べてみると彼女の言語のセンスの良さがわかります。また、彼女が東京の金田一家でつけていたノート「思いのままに」の中に次のような文章があり、彼女自身「銀のしずく 金のしずく」という言葉がたいへん気に入っていたと思われます。

・・・6月16日、・・・しばらく私はそのままグッタリしていると突然雨が降り出した。・・・いい気持ち。・・・暫くして雨戸をあけて外を見たとき

は実によい気持ちであった。青葉がしっとりと雨に濡れてポタリポタリと落ちる、緑の滴、銀の滴、こころよい風が青葉を渡る。

これは東京の金田一郎で眺めた銀のしずくですが、病を得た知里幸恵さんの眼には故郷登別の、大自然の中に降る雨が見えていたように思えてなりません。

「神謡」は知里さんの時代にはすでに炉のほとりで語られる叙事詩（ユーカラ）になって久しかったようですが、元々は踊りの歌であったそうです。その根拠が「サケへ」と言われる<折り返し>がどの謡にもついていることだとか。つまり、日本の民謡にある「よい、よい」「やーれん、そーれん」「やっしょ、まかしょ」などの囃子言葉のようなものが必ず句の冒頭についています。テレビでしか見たことはありませんが、熊祭り（イヨマンテ）に見られるように、昔々は火のまわりでアイヌの人たちが、動物の皮をかぶって、豊年や幸いを祈り、掛け声を付けて踊ったのでしょうか。「動物の神になって踊る」・・・そのときに一人称の語り視点の視点ができただけではないでしょうか。

私の知る限りでは民話や昔話は「昔々あるところにお爺さんとお婆さんがいました。」のように、三人称全知視点で語られることが多く、最後に人間に教訓を垂れるスタイルになっているように思います。「アイヌ神謡集」のようにさまざまな神が一人称の視点で歌って聞かせる、というのは他にあまり類を見ないのではないのでしょうか。

アイヌの神は存在する自然物全てに<宿る>ものであり、善であり悪でありつまり身近なものである。救世主や天照大神のような絶対的なものではない。ここにアイヌの先祖が「美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた」という幸恵さんの言葉の真実味を感じるのです。

参 考 文 献

- 「アイヌ神謡集」 知里幸恵編訳 （岩波文庫）
- 「アイヌのむかし話」 四辻一郎 （国土社 日本少年文庫4）
- 「アイヌの神謡」立石久雄 （西田書店）
- 「銀のしずく降る降る」藤本英夫 （新潮選書）
- 「銀のしずく思いのまま 知里幸恵の遺稿より」 富樫利一 （彩流社）
- 「コタンの口笛 第1部・第2部」石森延男 （偕成社）